

江戸の中の時代

川崎 茂

私は最近、江戸の歴史に関する本を読み、面白いと感じたことがあります。江戸の市民生活や社会には、現代とよく似た点が随分あるのです。

例えばサラリーマンの生活を見てみましょう。江戸の町で現代のサラリーマンに当たるのは旗本でしょう。彼らは給料を年三回もらいます。給料はお金ではなく、米ですが、千俵もの米を受け取るのは厄介ですから、「小切手」(手形)でもらいます。旗本は、これを「金融業者」(幕府の米の取引を扱う「札差し」)のところまで現金化します。ところが、米以外の諸物価の上昇で給与が目減りするものだから、旗本は、ついつい「サラ金」(これも「札差し」)に手を出してしまいます。こうして旗本は一層苦しくなり、一方、札差しは富をたくわえます。そこで、幕府は「サラ金」の規制に乗り出すのです。

レジャーブームも現代とよく似ています。人口百万人にも達する江戸は大消費地であり、商人や職人たちの中には生活のゆとりのあった者も多かったようです。彼らは日本中の名所に旅行します。これをあてこんだ「旅行業者」は、宿の予約など一切引きうけ、お伊勢参りなどの、「パック旅行」を企画し、これが大当たりをします。また、「カルチャーセンター」ではありませんが、小唄、尺八、俳諧など、様々な文化教室も盛んに開かれました。ただし、受講者は、今と違って、女性ではなく男性がほとんどだったそうです。「展覧会」も多く、有名な社寺は、所有する宝物や美術品を、見学料を取って一般公開(「開帳」)し、これにかなりの見学者が集まって、収益も上がったそうです。

では、江戸時代に「統計調査」はあったのでしょうか。もち論、近代的なものはありませんでしたが、江戸幕府は、享保6年(1721年)に初めて全国人口調査を行い、同11年以後、6年ごとにくり返し行ったそうです。ただし、調査対象は町人と農民だったそうです。経済調査もあったようで、有名な大岡越前守は、大阪から江戸に送られた生活必需品物資の調査をしたそうです。当時、どんな調査員がどんなふうに調査していたのか、興味のあることです。

さて、このような古いことを調べて何のためになるのでしょうか。私自身、最初は興味本位で調べ始めたのですが、実は案外、私の仕事の役に立つのではないかと思っています。



私の属している国土庁大都市圏整備局は大都市政策を担当しています。私は、現代の都市問題を考える場合、これまでは、明治以後の、いわゆる近代的な都市のことを考えがちでした。しかし、都市化とそれに伴ういろいろな問題は、それ以前からあったようです。このような問題に対して当時の人々がどのような解決策を考えたか、それがどのような効果をもたらしたか、などなど、見てゆくと参考になることも多いと思われます。例えば、防火対策、上水道の確保などについては、江戸時代にはその頃なりの努力があったようです。問題によっては、当時と今とは状況が全く異なっていて、比較が難しいこともあるでしょうし、案外、全く同じ発想でよく似たことをしているかも知れません。

昔から、社会はある時期は順調に発展し、そして、しばらく発展がやみ、その後、何かを契機に再び発展する、といったサイクルをくり返しているように思えます。そこで、過去のサイクルで現代とよく似た時期を分析すると、これからの社会の変化を見通すためのヒントが得られるのではないのでしょうか。

○執筆者の略歴

総理府統計局消費統計課、労働力統計課に勤務され、この間、昭和53年から56年まで、国連統計局に外向されていた。現職は国土庁大都市圏整備局計画課専門調査官。